
黄金と碧玉の娘

kaiwarekt0426

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄金と碧玉の娘

【Nコード】

N3912Z

【作者名】

kaiwarekt0426

【あらすじ】

帝国の西に広がる山脈には、古代より連綿と続くアモル族の里が点在している。

古代アモルの血脈も年を経てうすれ、今では女兒に先祖がえりが生まれるだけとなっていたが・・・。

高原の民

帝国の西の山岳地帯には、冷涼な気候のもと美しい森が広がっている。

白い花が咲き乱れる美しい森。

山の中腹から裾野にかけては、古代から連綿と続くアモル族の生活圏であった。

古き人々の末裔アモル族。

彼らの総数は、10万人程度である。

アモル族の長を務めるエンハンス族、草原地帯で放牧を主に行っているティモル族、山から流れ来る大河に寄り添って暮らすロルガ族等、数千人単位の部族をまとめて、アモル族と呼ぶ。

山岳地帯の中央は盆地が開けており、アモルの有力な部族であるエンハンスの一族が大きな館を構えている。

エンハンスの族長の館は長大な石の壁に囲まれ、軒先にはアモル族最大の市場町が開けていた。

今日は、大規模な隊商がエンハンスの市を訪れる日である。

「ほう・・・」

エンハンス族一番の豪商であるカファの店に届けられたのは、夢のような品々。

カファが長の意を受け、特別に注文をしたものである。

「私でも、生まれてはじめてみるような品ですな」

カファ老人が、しみじみとため息を付いた。

帝国の贅を集めたようなきらびやかな宝石や布、繊細な小箱に詰め込まれた香料。

商人は品物のよさを誇張するように大きくうなずく。

「大公家の御用商人から、特別に取り寄せたものです。運搬には大変な気を使いまして、ハヴァルの傭兵隊を雇い入れました。」

ハヴァルの傭兵隊は、国を持たぬ先頭民族の成れの果てだ。

腕が立つ分、並ならぬ金がかかる。届いた品々は、彼らに警護させるほど高価な品なのだ。

「この碧玉。サラハ様の祝いにぴったりではないかな・・・。」

カファ老人は、大きな碧玉を手に取り、覗き込んだ。

宝石は、荒く研磨された状態のまま持ち込んで、高貴な客の要望に沿って削りなおし、装飾品に仕立て上げるのが普通である。

しかしこの石は、田舎であるエンハンス族の街に持ち込まれることを考慮してか、美しい形に磨き上げてあった。

「おお、ちょうどサラハ様のお目のような色をしている。これで首飾りをお作りしたならば、どれほどサラハ様にお似合いになることか。」

商人が如才なく微笑んだ。

「サラハ様には暫くお目にかかっておりませんが、お美しくなられたことでしょう。」

「ええ」

カファは深々とうなずいた。

「あの方はアモルの女神の現身ですからな」

「アモルの女神？とは？」

「ああ、失礼。古代アモル族の先祖がえりのような美しい方を、年よりはそのように呼ぶのです。」

カファは微笑んで宝石をもう一度覗き込んだ。

「今ではめったに生まれませんなあ。とくに男の先祖がえりが生まれることはめったにないのです。ほとんどが娘なので、そう呼んでいるのですよ。」

石の検分を終え、カファは言った。

「ではこちらの品、サラハさまのお誕生日の品として、買い入れさせていただきます。」

黄金の髪娘

「商人が来たの?!」

目の前にぶら下がったすばらしい黄金色のみつあみに、エルフリードは驚いて顔を上げた。

エルフリードは新米の傭兵である。

兄のアロイセルと共にハヴアルの傭兵隊に入り3年。

隊商の護衛として、エンハンス族の族長館の市場に到着したばかりだ。

「何だあ?」

エルフリードが持たれかかった石段の上から、ほっそりした少女が覗き込んでいた。

それ自体が光を放つような純金の髪、色粉で染めたかのような鮮やかな青の瞳をしている。

「ね、市に商人が来たの? 今日は何の市が立つの? インクや羽ペンが来た?」

きらめく色彩に包まれた少女が、矢継ぎ早にエルフリードに話しかける。

「何だよいきなり!」

「傭兵でしょ、商人と来たんでしょ? 外から来た人? 私と話してくれる?」

少女が身軽に石段から飛び降り、エルフリードに並んだ。

「何だよ・・・」

派手な目と髪の色だが、顔はかわいいな、とエルフリードは思った。自分よりも5つくらい年下だろうか。14、5の子供だった。

「私サラハって言います」

「・・・」

「名乗りなさいよ、騎士ではないの？」

黙りこくったエルフリードが気に入らないらしく、少女が頬を膨らませた。

「・・・」

子供の相手が面倒くさかったので、エルフリードはそっぽを向いた。酒でも飲むかと思っていたところだったのに・・・。

「ねえ、騎士が淑女に名乗らないなんて・・・」

「騎士じゃねえよ！」

思わず言い返してしまう。

帝国騎士だったこともあるが、あつという間に解雇された・・・とはいえなかった。

「なんだ、おまえ、えー」

「サラハです。」

「サラハちゃん、俺用事あるから行くわ。市にインクは来てねえよ。今日は宝石の日だよ！」

「待って！」

サラハがエルフリードの袖を細い指でつかんだ。

「お前、傭兵に何を・・・」

警戒心がない娘だ、とエルフリードは振り返った。ちょっと怒鳴ってやろうか。

「私と同じような目と髪の色をしているの、おどろいた。あなたと話したいの。」

サラハの真っ青な瞳が、色を深めてエルフリードを見返した。小さなかわいらしい顔が紅潮している。

「は？髪？金色の髪なんてごまんというんだけど・・・」

「だって同じでしょう！」

みつあみをエルフリードの目の前に突き出し、サラハは胸を張った。

「黄金を溶かした金、碧玉を埋めこんだ青、同じなの」

「はぁ・・・？」

ずいぶんとご大層な表現だ、とエルフリードはあきれ返った。

ただの金髪碧眼、アモル族には珍しくないのに・・・。

『へんな子だな・・・』

サラハの服装は、簡素な白茶布の服に、花の衣裳を縫いこんだ娘らしいベルト。

みつあみにした髪は若い娘らしく柔らかそうだ。

アモル族の素朴なかわいい娘にしか見えないのだが・・・。
都会から来た人間の気を引きたいだけなのかもしれない。

「ねえ、見て欲しいの、あなたの髪。」

エルフリードは、ひとつに束ねた自分の髪をつまんで、目の前に持ってきた。

母譲りの、黄金の髪・・・。

「まあ、似てるけどな・・・」

うんうん、とサラハはうなずく。

「目の色も同じよ」

「鏡なんてめったに見ねえから、わかんないよ」

色まで鮮やかに写るような鏡は珍しいし、そもそもそこまで自分の顔を眺め回すことなどエルフリードにはない。

「母ちゃんがアモル族の出なんだよ！」

面倒になって、エルフリードは声を荒げた。

「そうなの？」

サラハが顔を輝かせた。

「珍しくもないだろ！親父が帝国の人間で、母ちゃんがアモル族だ

ったんだ！

俺は母ちゃんに笑っちゃうほどそっくりなんだよ！」

何でこんな娘の相手をしてるんだろう・・・と、エルフリードはため息をついた。

「お母様はどうなさったの？」

サラハが身を乗り出した。

「死んだ。というより、何でお前、そんな俺のこと気にしてるの？」

「だって男の人で初めて見た、私のおばあちゃましか見たことなかった、この髪と目をした人を。」

サラハの小さな顔が輝く。

「はあ・・・」

なんか変な娘に絡まれちゃったな、とエルフリードは肩を落とした・・・。

外の人間が地元娘と話などをしているせいだろうか。

周囲の目も厳しいように感じる。

「ほら、行っちゃまえ、知らない男に話しかけたりするな。若い娘は家で刺繍でもしてろよ。」

エルフリードは手を振り、サラハを追い払おうとした。

「・・・はい。わかりました。もしよかったら、あとで父を尋ねてくださいね。」

サラハがようやくあきらめた様子を見せる。

「父？」

「はい。ボルド・エンハンス。エンハンスの族長です。あなたの髪と瞳を見たら、父も驚くと思う。ぜひあとで、館に来てください。」
さようなら、と妙に律儀に頭を下げて、サラハは背を向けた。

「族長のお嬢様・・・？」

細い背中を見送りながら、もう一度つぶやく。

「あれがお嬢様かよ・・・」

大量の貴金属は、あの小さな少女のために運ばれてきたのか・・・。

兄と弟

「エル、待たせたな。給金は受け取ってきたから、しばらくは自由の身だ。どうする？あたかいものでも食べるか？」

兄のアロイセルの声で、ぼんやりしていたエルフリードは顔を上げた。

柔らかな淡い茶色の髪に、光の加減によっては緑色になる薄茶色の瞳をしている。

父親にそっくりで、エルフリードにはあまり似ていない。

「ああ、兄貴、お帰り……。」

「どうした？」

「うん、変な女に声をかけられた」

「また女か。」

アロイセルが苦笑した。

母に生き写しの美貌を持ちながらまったく頓着せず、他人の恋慕に何度も振り回されている弟が頼りなくて、可笑しい。

「いや、女っていつでも、ガキ。ちびっこいガキ。族長のお嬢様だって言ってた」

「え、サラハお嬢様か？」

「知ってるのか？」

「何でも古代アモル族の先祖がえりで、一族から掌中の珠として愛されてるらしいな。」

アロイセルが笑う。

「お前は知らなかったのか。」

「興味なくてなあ……。」

「俺なんかは、そういう伝説的な話を聞くと、頭に残ってしまうんだが。黄金と碧玉の娘か。どんな人だった？」

エルフリードは首をひねった。

「うーん……俺とおんなじ金髪で、俺と同じ目の色してた。」

「へえ。じゃあお前は『黄金と碧玉の息子』なのかな」

「やめろよ・・・」

げんなりした弟を見て、アロイセルが笑い転げる。

「お前は俺と同じアモルの混血児だし、目の色が少し違うんだ、安心しろ。」

アロイセルは、弟の顎を押さえて、瞳を覗き込んだ。

「よく見るとき、お前の目は奥のほうが薄い灰色がかってるんだ。完全な青じゃない。光の加減で変わるんだよ。サラハお嬢様は気づかなかっただろうけどね。」

「そうなんだ」

なんとなく、エルフリードはほっとした。

「お前が完全な先祖がえりだったら、アモルの年寄り連中に崇められて、ただで食事が運ばれてきたかもしれないな。ただし、遊べないぞ。生き神様として、清廉潔白が求められる。酒なんてもってのほかだ。」

「え、勘弁してよ！」

「冗談だよ。」

アロイセルが再び笑い転げた。

「ああ、可笑しい。お前単純だからな・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3912z/>

黄金と碧玉の娘

2011年12月13日11時49分発行